

## 陸游の絶句

朱 東 潤 著  
三 野 豊 浩 訳

### 〔解題〕

○本稿は、朱東潤（一八九六～一九八八）の『陸游研究』（一九六一年九月、中華書局）所収の論文「陸游的絶詩」の翻訳である。

○原文には注はないが、本文中に引用された陸游の詩の製作時期を、末尾に補注として記した。製作時期は、すべて錢仲聯『劍南詩稿校注』（一九八五年九月、上海古籍出版社）の題解による。

○訓読は旧仮名遣いを原則としたが、ルビに関しては新仮名遣いとした。

陸游（一一二五～一二一〇）は絶句の方面において、輝かしい発展を有する。彼は一面では唐人の優秀な伝統を継承した

が、より多く宋人の「議論を好む」という特徴を発揮し、絶句の中で彼の愛国的な精神を表現している。

陸游の絶句も、やはり多種多様である。『劍南詩稿』巻二十九の「五雑組」は三言六句であるが、これは一種の特殊な形式であり、全集の中にその他の例が見られないものであるから、しばらく置いて論じない。その次は五言絶句であり、全集の中に約二百首存在する。たまたま存在する三言を除けば、五言絶句は最も簡潔な形式ということになるだろう。一般的に五言絶句は平仄のバランスの助けを借りることが少なく、それゆえそれ自身が備えている豊富な感情に依拠する以外には、少しも音調の心地よさに頼ることができない。陸游の五言絶句の佳作には、たとえば次のようなものがある。

老死已無日 老死 已に日無きも  
 功名猶自期 功名 猶ほ自ら期す  
 清筋太行路 清筋 太行の路  
 何日出王師 何れの日か 王師を出さん  
 『詩稿』卷二十二 「懐ひを書す」<sup>(2)</sup>

千金募戰士 千金 戰士を募り  
 萬里築長城 萬里 長城を築く  
 何時青塚月 何れの時か 青塚の月  
 却照漢家營 却た漢家の營を照らさん  
 『詩稿』卷二十二 「懐ひを書す」<sup>(2)</sup>

夜泊武昌城 夜泊す 武昌の城  
 江流千丈清 江流 千丈清し  
 寧爲雁奴死 寧ろ雁奴と為りて死するとも  
 不作鶴媒生 鶴媒と作りて生きざらん  
 『詩稿』卷七十九 「古意」<sup>(3)</sup>

いずれも彼特有の作風を表現し得ている。その他には、たとえば次のようなものがある。

疏鐘渡水來 疏鐘 水を渡りて來り  
 素月依林上 素月 林に依りて上る  
 煙火認茅廬 煙火 茅廬を認め

故依船篷望 故に船篷に依りて望む  
 『詩稿』卷三十二 「夜歸」<sup>(4)</sup>

やはり清新な詩句によって、彼の故郷の家に寄せる断ち難い思いを表現し得ている。

その次は六言絶句であるが、これは五言絶句より一層素朴な形式である。五言は平仄のバランスに頼ることが少ないとはいえず、結局のところ奇数の詩句であり、前漢以来、古くからすでに民間に伝わる歌謡の体裁となっており、やはり一定の韻律がある。六言は偶数の詩句であり、こうしたわずかばかりの伝統すら剥奪されてしまい、それゆえただひたすら徒手空拳で戦うばかりで、全く抛り所がない、ということになるのである。宋代以前の詩人の六言絶句が極めて少ないのは、おそらくこのためだろう。陸游はこの形式にやはり興味を感じたらしく、詩集の中に約三四十首が存在する。その中に、たとえば次のようなものがある。

功名正恐不免 功名 正に恐らくは免れざらん  
 富貴酷非所須 富貴 酷だしくは須むる所に非ず  
 鐵馬未平遼碣 鐵馬 未だ遼碣を平らげず  
 釣船且醉江湖 釣船 且くは江湖に酔はん  
 『詩稿』卷十六 「六言」<sup>(5)</sup>

この詩は、淳熙十年（一一八三）陸游五十九歳、免職された後で、山陰（今の浙江省紹興市）に隠居している時に書かれたものである。彼は、自分は決して富貴を追求しているわけではないが、功名を建てる機会はないわけではなく、敵を討伐平定し、占領された土地を取り戻すまでは、故郷に留まり、一介の漁民となるのを妨げない、と言明している。ここには志士の愛国の思想が充満しており、同時にまた当時の知識人の、権門に奔走することを潔しとしない気風をも伝えている。素朴な形式によって豊富な内容を伝え、同時に詩的な感情も充満しているのだから、この詩は成功していると見なすべきだろう。

陸游の絶句の圧倒的多数は七言絶句であり、これは唐宋以来の詩人に共通の状況である。唐人の絶句は特に「神韻」を重んじたが、「神韻」というものが把握し難いので、清代の王士禛（一六三四～一七二一）は、これを「清遠」と解釈した。「清遠」とは何か？ かつて唐人が語っている。殷璠の『河岳英靈集』<sup>(6)</sup>は、常建（七〇八？）の詩を次のように評している。

其旨遠、其興僻、佳句輒來、惟論意表。

其の旨は遠にして、其の興は僻、佳句輒ち來れば、惟だ意表を論ず。

このことは、唐代のある種の詩人の思惟と感情が、現実の日

常生活とは比較的疎遠なものであるという状況を説明したものである。当然、唐代の詩人がすべてそうだというわけではない。ところが何人かの批評家たちは、これこそが唐人の特徴であると見なし、しかもこの一点を唐宋詩の境界としている。嚴羽（生没年不詳）の『滄浪詩話』（詩辨）は、

盛唐諸人惟在興趣、羚羊掛角、無跡可求。

盛唐の諸人惟だ興趣に在り、羚羊掛角、跡の求むべき無し。

と指摘しているが、その意図はここにある。嚴羽の主張は反現実主義的だが、宋代に嚴羽が生まれ、嚴羽の主張が宋代においても一定の影響を及ぼし得たことから、宋代のある種の詩人が、唐人の「神韻」にやはり未練を残していたことがわかる。陸游にもこのような作品が存在するだろうか？ 存在する、と言うべきである。彼の若年と中年の作品の中にいずれも存在し、晩年以後は比較的少なくなる。学習の過程において、陸游は彼の時代と環境とを超越する方法がなかったのである。それは彼の詩の、たとえば次のようなものである。

衣上征塵雜酒痕 衣上の征塵 酒痕を雜へ

遠游無處不消魂 遠游 処として消魂せざるは無し

此身合是詩人未。此の身合まじには是れ詩人たるべきや未いなや  
細雨騎驢入劍門。細雨驢のりに騎りて劍門に入る  
『詩稿』卷三「劍門道中にて微雨に遇ふ」<sup>(8)</sup>

明窓短壁拂蛛絲。明窓短壁蛛糸を払ふ

常是江邊送客時。常に是れ江辺に客を送るの時

留滯錦城生白髮。錦城に留滯して白髮を生ず

不如巢燕有歸期。如しかず巢燕の帰期有らんには

『詩稿』卷八「城北の青蓮院の方丈の壁間に、燕子を画ける者有り、過客多く詩を題す。予も亦た戯たわむれに二絶句を作る」<sup>(9)</sup>

舟中一雨掃飛蠅。舟中の一雨飛蠅を掃はらひ

半脱縮巾臥翠藤。半なかば縮巾を脱いで翠藤に臥す

清夢初回窗日晚。清夢初めて回かえり窓日く晚れ

數聲柔鱗下巴陵。數声の柔鱗巴陵に下る

『詩稿』卷十「小雨にて極めて涼しく、舟中に熟睡して夕に至る」<sup>(10)</sup>

桐陰清潤雨餘天。桐陰清潤なり雨余の天

檐鐸搖風破晝眠。檐鐸風に揺れて晝眠を破る

夢到畫堂人不見。夢に畫堂に到りて人見えず

一雙輕燕蹴箏弦。一雙の輕燕箏弦を蹴ける

『詩稿』卷十二「夏日昼寢いねて夢に一院に遊ぶ。闕然けつぜんとして人無く、簾影堂に満ち、惟ただだ燕の箏弦を踏ふみて声有るのみ。覺さめて鉄鐸の風に響ききて瑣然さぜんたるを聞く。殆おそくは夢みし所なるか。因よりて絶句を得たり」<sup>(11)</sup>

莫嫌風雨作新寒。嫌なかふ莫なれ風雨の新寒を作すを

一樹青楓已半丹。一樹の青楓已すでに半なかば丹あかし

身在范寬圖畫裏。身あは在あり范寬の図画の裏うち

小樓西角剩凭欄。小樓の西角にて剩あまり凭よ欄よ

『詩稿』卷十七「初冬雜題」<sup>(12)</sup>

新雁南來片影孤。新雁南來片影孤なり

冷雲深處宿菰蘆。冷雲深とき処ところ菰蘆に宿す

不知湘水巴陵路。知らず湘水巴陵の路みち

曾記漁陽上谷無。曾かつて漁陽上谷を記しるや無いなや

『詩稿』卷七十八「新雁を聞きて感有り」<sup>(13)</sup>

陸游の絶句の中に、我々は唐人の「神韻」に富んだ絶句を見いだす。しかし宋人の絶句の中では、我々は宋人の特色によって推し量るべきであり、唐人の特色を要求することはできない。宋人の特色とは何か？ それは正に嚴羽が言うように、

近代諸公乃作奇特解會、遂以文字爲詩、以才學爲詩、以議

論爲詩。

近代の諸公、乃ち奇特解会(14)を作し、遂に文字を以て詩を爲し、才学を以て詩を爲し、議論を以て詩を爲す。

〔滄浪詩話〕詩辨

ということである。嚴羽はまた、次のように言う。

夫豈不工、終非古人之詩也。蓋於一唱三歎之音、有所歎焉。

夫れ豈に工ならざらんや。終に古人の詩に非ざるなり。蓋し一唱三歎の音に於て、歎焉(15)たる所有り。

〔滄浪詩話〕詩辨

嚴羽の主張は、一面的である。「文字を以て詩を爲す」とは古人のいわゆる「書袋を掉(16)ふ」ことであり、上手にするのが容易ではないが、このことはしばらく措いて論じない。「才学を以て詩を爲し、議論を以て詩を爲し」、そして同時に「一唱三歎の音」を付け加えるならば、何が良くないというのだろうか？ いわゆる「一唱三歎の音」とは一種の余韻(17)のことであり、古代の批評家のいわゆる「味外の味」であり、これは詩人が必ず考慮すべき問題である。詩は散文ではなく、作品の長さは一定の制限を受け、中でも絶句はわずか二十字あるいは二十八字

である。それゆえ詩人は創作の過程で精練を追求しなければならず、彼の完成品は一種の提示にとどまり、後は読者によって吟味され、補足される。これがいわゆる「一唱三歎」である。詩人の仕事は「一唱」であり、読者の鑑賞は「三歎」である。そして相互支援の下で、詩の創作が完成されるのである。「才学を以て詩を爲し、議論を以て詩を爲し」でも、提示の意義に注意できず、啓発の作用がなければ、絶句の任務を完成することはできないのである。しかしどうして「才学を以て詩を爲し、議論を以て詩を爲す」のでは、提示の任務に注意し、啓発の作用を完成することが絶対にできないなどというのだろうか？

陸游の絶句の中に、学識をひけらかした箇所は多くはないが、好んで議論を發する。しかし議論を發する中で、その多くはいずれも余地を残しており、読者に考えさせ、吟味させた後で、更に作者の意図を体得することができるようにさせている。これは正に唐詩の範囲の外にあって、一步を進める試みである。

陸游は、自己の運命に甘んじない人であった。彼は、自分には敵を打ち滅ぼし、占領地区を奪回する策略があると考えており、あと少しの所で成功を逃したために、生涯悔恨を残した。彼は詩の中でこう言っている。

北望中原涙滿巾 中原を北望すれば 涙巾に満つ  
黄旗空想渡河津 黄旗空しく想ふ 河津を渡るを

丈夫窮死由來事 丈夫窮死するは 由来の事  
要是江南有此人 要するは是れ 江南に此の人有らんこ  
とを

『詩稿』卷二十「北望」<sup>(18)</sup>

これは、一首の概括的な詩である。その他には、たとえば次のようなものがある。

夢裏都忘困晚途 夢裏 都て忘る 晚途に困しむを  
縦横草疏論遷都 縦横に疏を草して 遷都を論ず  
不知盡挽銀河水 知らず 尽く銀河の水を挽くとも  
洗得平生習氣無 平生の習気を洗ひ得るや無やを

『詩稿』卷二「夢を記す」<sup>(19)</sup>

三萬里河東入海 三万里の河東のかた海に入り  
五千仞岳上摩天 五千仞の岳上 天を摩す  
遺民淚盡胡塵裏 遺民の涙は尽く 胡塵の裏  
南望王師又一年 南のかた 王師を望んで 又一年  
『詩稿』卷二十五「秋夜將に暁ならんとし、籬門を出て涼  
を迎へて感有り」<sup>(20)</sup>

公卿有黨排宗澤 公卿 党有りて宗沢を排し  
帷握無人用岳飛 帷握 人の岳飛を用ゐる無し

遺老不應知此恨 遺老 応に此の恨みを知らざらんも  
亦逢漢節解沾衣 亦た漢節に逢へば 衣を沾すを解す  
同卷「夜范至能の『攬轡録』を読むに、言ふならく、中  
原の父老 使者を見て多く涕を揮ふと。其の事に感じて  
絶句を作る」<sup>(21)</sup>

七十衰翁臥故山 七十の衰翁 故山に臥す  
鏡中無復舊朱顏 鏡中 復た旧朱顔無し  
一聯輕甲流塵積 一聯の輕甲 流塵 積もり  
不爲君王戍玉關 君王の為に玉関を戍らさず  
『詩稿』卷三十「鏡を看る」<sup>(22)</sup>

書生忠義與誰論 書生の忠義 誰と与にか論ぜん  
骨朽猶應此念存 骨朽ちるとも 猶ほ応に此の念存すべ  
し  
砥柱河流僊掌日 砥柱の河流 仙掌の日  
死前恨不見中原 死する前に 恨むらくは中原を見ざる  
を

『詩稿』卷三十七「太息」<sup>(23)</sup>

衰疾沉綿短鬢疏 衰疾 沈綿として 短鬢 疏なり  
淒涼圯上一編書 淒涼なり 圯上 一編の書  
中原久陷身垂老 中原 久しく陥ち 身は垂老

付與囊中飽蠹魚 囊中に付与して 蠹魚を飽かしめん  
『詩稿』卷四十六「夏日雜題」<sup>(24)</sup>

陸游が南鄭（今の陝西省漢中市）を離れた後、前線での生活は、折にふれては彼に回想を生じさせ、それらはいずれも彼の悔恨を深めた。たとえば、次のように。

清夢初回秋夜闌 清夢初めて回り 秋夜 闌なり  
牀前耿耿一燈殘 牀前 耿耿として 一灯 残す  
忽聞雨掠蓬窗過 忽ち聞 雨の蓬窓を掠めて過ぎるを  
猶作當時鐵馬看 猶ほ 当時の鉄馬と作して看る  
『詩稿』卷十五「秋雨漸く涼しく、興元を懐ふ有り」<sup>(25)</sup>

狼煙不舉羽書稀 狼煙 拳がらず 羽書 稀なり  
幕府相從日打圍 幕府 相從ひて 日々に 打圍す  
最憶定軍山下路 最も 憶ふ 定軍山下の路  
亂飄紅葉滿戎衣 亂れ 飄る 紅葉 戎衣に 満つるを  
『詩稿』卷三十四「懷旧」<sup>(26)</sup>

曾從征西十萬師 曾て從ふ 征西 十萬の師  
白頭回顧只成悲 白頭 回顧すれば 只だ 悲しみを 成す  
雲深駱谷傳烽處 雲 深し 駱谷 伝烽の 処  
雪密嶓山校獵時 雪 密なり 嶓山 校獵の時

『詩稿』卷六十「昔に感ず」<sup>(27)</sup>

失敗の記憶は、ただ彼の疑問を肥大させるばかりだった。一人の愛国詩人として、彼は国家の前途を疑わずにはいらなかった。彼は詩の中でも、次のように詠っている。

百戰元和取蔡州 百戦して 元和 蔡州を取るも  
如今胡馬飲淮流 如今 胡馬 淮流に 飲す  
和親自古非長策 和親は 古より 長策に 非ず  
誰與朝家共此憂 誰か 朝家の 与に 此の憂ひを 共に せん  
『詩稿』卷二十一「估客に蔡州より來れる者有り、恨みを感じて日に弥る」<sup>(28)</sup>

陸游の絶句の中では、折々に樂觀主義的な輝きが発せられる。南鄭の前線ではもとより折々に勝利の予感があったことだろうが、たとえば彼が前線を離れた後でも、彼は依然として積極的に頽廢的な思想によって征服されることなく、時となく積極的に樂觀的な議論と予感を発している。ただ敗北主義者であってはじめて自分の失敗に安心できるのであり、樂觀主義者は必然的に屈服に甘んじず、失敗の瀬戸際で勝利を争い取ろうとし、同時に失敗の中にも、やがて訪れるであろう勝利を看取す。陸游は南鄭にいた時に、次のような詩を書いている。

梁州四月晚鶯啼 梁州四月晚鶯啼く  
 共憶扁舟罨畫溪 共に憶ふ 扁舟もて画溪を罨ふを  
 莫作世間兒女態 作す莫れ 世間の兒女の態  
 明年萬里駐安西 明年 万里 安西に駐せん

『詩稿』卷二「高子長參議の道中二絶に和す」<sup>(29)</sup>

この詩は樂觀主義的な精神が充満し、思惟と感情も大変自然である。しかし南鄭を離れて以後の詩からは、より一層彼の積極的な精神を看取することができる。たとえば、次のように。

緑沉金鎖少時狂 緑沈 金鎖 少時の狂  
 幾過秋風古戰場 幾たびか過ぐ 秋風の古戰場  
 夢裏都忘閩嶠遠 夢裏 都て忘る 閩嶠の遠きを  
 萬人鼓吹入平涼 万人の鼓吹 平涼に入る

『詩稿』卷十一「建安遺興」<sup>(30)</sup>

金尊翠杓猶能醉 金尊 翠杓 猶ほ能く酔ふ  
 狐帽貂裘不怕寒 狐帽 貂裘 寒きを怕れず  
 安得驍驄三萬匹 安にか驍驄 三万匹を得て  
 月中鼓吹渡桑乾 月中に鼓吹して桑乾を渡らん

『詩稿』卷十三「湖村の月夕」<sup>(31)</sup>

三受降城無壅城 三受降城 壅城無し

賊來殺盡始還營 賊来れば 殺し尽くして 始めて營に還る  
 漠南漠北靜如掃 漠南 漠北 静かなること掃けるがごとし  
 清夜不聞胡馬聲 清夜 胡馬の声を聞かず

『詩稿』卷十四「軍中雜歌」<sup>(32)</sup>

僵臥孤村不自哀 孤村に僵臥するとも 自ら哀れまず  
 尚思爲國戍輪臺 尚ほ思ふ 國の爲に輪臺を戍らんことを

夜闌臥聽風吹雨 夜闌にして臥して風の雨を吹くを  
 聴けば

鐵馬冰河入夢來 鉄馬 氷河 夢に入り来る  
 『詩稿』卷二十六「十一月四日風雨大いに作る」<sup>(33)</sup>

胸中十萬宿貔貅 胸中 十萬 貔貅を宿す  
 早轟黃旗志未酬 早轟 黃旗 志 未だ酬ひず  
 莫笑蓬窗白頭客 笑ふ莫れ 蓬窓 白頭の客  
 時來談笑取幽州 時来らば 談笑して 幽州を取らん

『詩稿』卷二十八「冬夜 書を読み感有り」<sup>(34)</sup>

当然ここで我々は、陸游の「兒に示す」<sup>(35)</sup>をあげねばならない。

死去元知萬事空 死し去れば元より知る 万事空しと  
 但悲不見九州同 但だ悲しむ九州の同じきを見ざるを  
 王師北定中原日 王師北のかた 中原を定むる日  
 家祭無忘告乃翁 家祭 忘るる無かれ 乃が翁に告ぐるを  
 『詩稿』 卷八十五

これは最後の一首であるが、彼の生命がすでに最後の一瞬に到達しているにもかかわらず、彼は「帝王の軍隊が北方の中原を平定する日」が訪れることを依然として疑わず、依然として積極的である。彼は腐敗した社会の中で何度も失敗に遭遇しているのだから、腐敗した政権に対して、なおも幻想を寄せ続けるべきではなかった。しかし彼は、中国の人民が失敗の中から身を翻し、解放と自由を追求することができるかと信じて疑わなかった。彼は自己の積極性を疑わず、また人民の力量を疑わなかったのである。

唐人の絶句にもまた議論を有するものが存在するだろうか？  
 当然やはり存在する。李白（七〇一〜七六二）の「永王東巡歌」<sup>(36)</sup>は、次のように詠う。

試借君王玉馬鞭 試みに君王の玉馬の鞭を借り  
 指揮戎虜坐瓊筵 戎虜を指揮して 瓊筵に坐せしめん  
 南風一掃胡塵靜 南風 一たび胡塵を掃ひ静めなば  
 西入長安到日邊 西のかた 長安に入りて 日辺に到らん

正に前掲の陸游の七言絶句と同じ路線を歩んでいる。ここでは正に「議論を以て詩を為す」ことは、決して宋人から始まるのではなく、それゆえやはり「近代の諸公」の「奇特解會」でもないことが看取される。同様に我々はまた、陸游のある種の作品は、李白と淵源が相通じる所があることを看取できる。当時の人々は彼を「小李白」と呼んだが、それにはやはり一定の理由があり、陸游が一家を成した後は、おそらくこのような呼称は、決して最も適切なものではなかっただろうと思われる。

詩中に議論を帯びることは悪いことではなく、時には詩の現実主義的な意義を強化しさえする。しかし議論が多すぎたり、あるいは率直すぎたりすると、これは必然的に詩の過度の散文化を引き起こす。散文は散文であつて、詩ではない。それゆえ詩句の率直さは、詩の病弊の一つである。率直に類するのは、濫調である。平凡な字句をあまりに多く用い過ぎると濫調となり、美的な情感を提示できないばかりか、かえつて読者の嫌悪を引き起こす。陸游の作品の中で、このような状況はやはり存在する。

率直の原因は主として、詩人の思いがあまりに性急であり、詩句が鍛練を経おらず、口をついて言葉が出ることにあり、それゆえ詩に似ていないということになるのである。たとえば次のようなものである。

江閣欲開千尺象 江閣 開かんと欲す 千尺の象

雲龕先定此規模 雲龕先に此の規模を定む  
 斜陽徒倚空三歎 斜陽に徒倚して空しく三歎す  
 嘗試成功自古無 成功を嘗試せるは古より無し  
 『詩稿』卷三「能仁院の前に石象の丈余なる有り。蓋し大像を作りし時の様ならん」<sup>(38)</sup>

はいずれも攻撃を提示し、それゆえこれら数首は、実際にはいずれも極めて良い素材を備えている。しかし正に口をついて言葉が出たがために、少なくとも唐詩とは一定の距離がある。このような作法にも、やはりその来源がある。『詩經・小雅』の「雨無正」(節南山の什)である。

趙魏胡塵千丈黃 趙魏胡塵千丈黄なり  
 遺民膏血飽豺狼 遺民の膏血豺狼を飽かしむ  
 功名不遣斯人了 功名斯の人をして了せしめずんば  
 無奈和戎白面郎 和戎の白面郎を奈ともする無し  
 『詩稿』卷十七「海首座の俠客の象に題す」<sup>(39)</sup>

哀哉不能言 哀しき哉言ふ能はず  
 匪舌是出 舌の是れ出めるに匪ず  
 維躬是瘁 維れ躬是れ瘁む  
 嗇矣能言 嗇き矣能言  
 巧言如流 巧言流るるごとく  
 俾躬處休 躬をして休に処らしむ

巨浸稽天日沸騰 巨浸天に稽し日々に沸騰す  
 九州人死若丘陵 九州の人死すること丘陵のごとし  
 一朝財得居平土 一朝財平土に居るを得なば  
 峻宇雕墻已遽興 峻宇雕墻已に遽かに興らん  
 『詩稿』卷五十一「夏書を読む」<sup>(40)</sup>

また、同書の「巷伯」(同前)である。

これら数首の詩から、我々は陸游の憤慨を看取する。隆興年間(一一六三〜一一六四)の北伐が、少し試みられただけにすぐ中止になってしまったことに対して。乾道年間(一一一六〜一一七三)の対外的屈服と戦争の放棄に対して。とりわけ小朝廷の当面の安全に甘んじる姿勢と太平の粉飾に対して。彼

彼譖人者 彼の人を譖る者  
 誰適與謀 誰をか適として与に謀れる  
 取彼譖人 彼の譖人を取りて  
 投界豺虎 豺虎に投げ界へむ  
 豺虎不食 豺虎食はずんば  
 投界有北 有北に投げ界へむ  
 有北不受 有北受けずんば  
 投界有昊 有昊に投げ界へむ

いずれも、同様の状況の下で作成されたものである。しかしここには一つの重要な違いがある。唐詩の風格がすでに普遍的な承認を得た後では、読者は非常に安易に唐詩の尺度によつて宋詩を推し量ろうとするため、このことが人にこれらの詩が唐詩に似ていないと感じさせるのである。

陸游の絶句の中には、濫調もまた存在する。北宋の邵雍（一〇一〇—一〇七七）の作品の中に、このような詩句は常に出現する。これらの詩は格言のようであり、また処世訓のようでもあり、平凡な字句の中で、何らかの平凡な道理を説いている。陸游の詩集の中にも、たとえば次のようなものが見られる。

走馬平欺刺繡坡 馬を走らせて 平らかに欺く 刺繡坡  
 放船横截亂絲渦 船を放ちて 横さまに截る 乱糸渦  
 従来倚箇心平穩 従来 心の平穩なるに倚るも  
 遇險方知得力多 險に遇ひて方に知る 力を得ることの多きを

『詩稿』卷三「戯れに題す」<sup>(41)</sup>

風俗陵夷日可憐 風俗の陵夷せること 日々に憐れむべし  
 乞墦鉗市亦欣然 乞墦 鉗市 亦た欣然たり  
 看渠皮底元無血 看よ 渠の皮底に元より血無し  
 那識虞卿魯仲連 那ぞ識らん 虞卿と魯仲連とを

『詩稿』卷二十四「俗を歎ず」<sup>(42)</sup>

暮年世事轉悠悠 暮年の世事 転た悠悠  
 攬涕凄然類楚囚 涕を攬り 凄然として楚囚に類す  
 不道渾無排遣處 道はず 渾て排遣する処無しと  
 病觀周易悶梳頭 病みては周易を觀 悶へては頭を梳る  
 『詩稿』卷三十「懐ひを遣る」<sup>(43)</sup>

古言忍字似而非 古言の「忍」字は似て非にして  
 獨有痴頑二字奇 獨り「痴頑」の二字の奇なるのみ有り  
 此是龜堂安樂法 此れは是れ 龜堂の安樂の法なり  
 大書銘座更何疑 大書して座に銘し 更に何をか疑はん  
 『詩稿』卷五十五「雜感」<sup>(44)</sup>

この他に「隣人に諭す」<sup>(45)</sup>三首があり、韻律の面でまた少しばかりの変化がある。七言四句で、毎句押韻しており、絶句の中の柏梁体となっていて、内容はやはり処世訓である。

鄰曲存米當共春 隣曲 米を存すれば 當に共に春くべきに  
 何至一旦不相容 何ぞ至らん 一旦にして相容れざるに  
 爲善何嘗分士農 善を爲すに 何ぞ嘗て士農を分かつん  
 堯民皆當變時雍 堯民皆 當に時雍に變ずべし

相攻本出忿與疑 相攻むるは本より忿りと疑ひとに出

能不終訟固已奇 能く訟を終へざるは固より已に奇なり

訟端可窞君試思 訟端窞くべし君試みに思へ

歳時鄰里相諧嬉 歳時隣里相諧嬉するを

世通婚姻對門扉 世々婚姻を通じて門扉を対し

禍福饑飽常相依 禍福飢飽常に相依る

忿爭得直義愈非 忿り争ひて直を得るも義として愈々非なり

不如一醉懷牒歸 如かず一酔して牒を懷きて帰らんには

『詩稿』卷六十二

どうして陸游にこのような詩句があるのだろうか？ 若年の作として、我々は「戯れに題す」一首を見いだす。しかしその他の詩はいずれも晩年になって書かれたものであり、晩年の作とこれらの詩は類似の点が大変多く、こうしたすべては当然だ『劍南詩稿』の編年から問題を考えるしかない。若年の詩は陸游によって厳選されており、「戯れに題す」の存在は、もしかすると彼がこの詩の創作に対して何か感じる所があり、興味を引き起こしたことによるのかも知れない。詩を書く時にもとよ

り「戯れに題」したからには、詩を選ぶ時にも、やはり「戯れに存」することを妨げない、ということではなからうか？ これは偶然の例外である。中年の詩は陸游によって編集されており、それゆえやはり一定の取捨選択がある。ただ晩年の詩だけは、第二十一巻以後は陸子適（陸游の七男）によって編集され、機械的に百篇を一巻として整理されており、それゆえどのような作品も一律に編入されていて、まったく一定の選択基準がない。第二十一巻と第六十八巻が編集された年に、子適はわずかに二十八歳であり、詩に対する認識は、おそらくまだ成熟していなかったことだろう。それゆえ陸游の晩年の濫調は依然として存在し、ここでも正に、陸游が晩年以降生活が頹廢的であり、それゆえ詩句の中でも時となく率直の病弊を呈することが看取されるのである。

我々は陸游の絶句から、唐人の絶句の特長を彼がすべて保存しており、そして唐人が到達しなかった境地に、時には彼も十分に到達できたことを看取できる。現実主義の光は、彼の道を照らし出した。陸游は彼の時代を見、大衆の要求を見、彼の作品に人民の要求を如実に反映した。陸游は時には確かに「議論を以て詩を為す」道を歩んだが、この道は元来唐人の作品の中に具体的に存在するものであつて陸游の独創ではなく、しかもそれを多く運用した時には、かえって詩の内容を豊富なものにした。詩は芸術の形式を必要とするのみならず、思想的な内容をも必要とする。豊富な感情と熱烈な要求とを有し、しかも優

美な形式を運用して過不足なく伝えることができてはじめて、良い詩となるのである。陸游の絶句は、時には確かにこのような境地に到達し得ている。それらは欠点がないわけではないが、その長所と比較するならば、さほど重要な問題ではないだろう。

〔訳者補注〕

- (1) 「五雜俎」 紹熙四年冬、山陰にて。二首連作。其一「五雜俎、山雉羽。往復還、江頭路。不得已、貴臣去」。其二「五雜俎、機上綺。往復還、冶遊子。不得已、富兒死。五雜俎または五雜俎は、古楽府の名前。三言六句から成り、後世の詩人が模倣したことにより、詩歌の形式となった。
- (2) 「書懷」 錢仲聯『劍南詩稿校注』は「書懷絶句」に作る。紹熙二年夏、山陰にて。
- (3) 「古意」 嘉定元年冬、山陰にて。二首連作。
- (4) 「夜歸」 慶元元年春、山陰にて。
- (5) 「六言」 淳熙十年十一月、山陰にて。四首連作の其一。
- (6) 『河岳英靈集』 書名。三卷。唐の殷璠編。常連ら二十四人の詩およそ二百三十四首を収録する。三卷を以て上・中・下の三品に分かつ。各詩人の姓名の下に品題があり、総集の評語があるのは、この書から始まる。
- (7) 羚羊掛角 羚羊は大きな角のある羊に似た動物で、よく角を木に引っ掛けてぶら下って眠り、つかまえても足跡が知れないといふ。
- (8) 「劍門道中遇微雨」 乾道八年十一月、南鄭から成都に赴く道中、劍

- 門にて。
- (9) 「城北青蓮院方丈壁間有畫燕子者過客多題詩予亦戲作二絶句」 淳熙四年七、八月、成都にて。二首連作の其二。
- (10) 「小雨極涼舟中熟睡至夕」 淳熙五年五月、成都より帰還の道中、巴陵の江中にて。
- (11) 「夏日晝寢夢游一院闐然無人簾影滿堂惟燕鬪箏弦有聲覺而聞鐵鐸風響驟然殆所夢也邪因得絶句」 淳熙七年五月、撫州にて。
- (12) 「初冬雜題」 淳熙十一年冬、山陰にて。六首連作の其二。
- (13) 「聞新雁有感」 嘉定元年秋、山陰にて。二首連作の其二。
- (14) 奇特解會 特別で、一風変わった解釈。禪語に由来する。
- (15) 歎焉 不十分で満足できないこと。
- (16) 掉書袋 詩文を作る際に、書物から得られた知識を傾注すること。
- (17) 味外味 口では味わうことのできない味。詩文の意味の深く窮まりないこと。
- (18) 「北望」 淳熙十五年冬、山陰にて。
- (19) 「記夢」 乾道七年正月、夔州にて。
- (20) 「秋夜將曉出籬門迎涼有感」 紹熙三年秋、山陰にて。二首連作の其二。
- (21) 「夜讀范至能攬轡錄言中原父老見使者多揮涕感其事作絶句」 紹熙三年冬、山陰にて。
- (22) 「看鏡」 紹熙五年夏、山陰にて。二首連作の其二。
- (23) 「太息」 慶元四年秋、山陰にて。四首連作の其二。
- (24) 「夏日雜題」 嘉泰元年夏、山陰にて。八首連作の其八。
- (25) 「秋雨漸涼有懷興元」 淳熙十年八月、山陰にて。三首連作の其三。
- (26) 「懷舊」 慶元二年春、山陰にて。六首連作の其三。
- (27) 「感昔」 嘉泰四年冬、山陰にて。七首連作の其五。
- (28) 「估客有自蔡州來者感悵彌日」 紹熙元年春、山陰にて。二首連作の其二。
- (29) 「和高子長參議道中二絶」 乾道八年四月、南鄭にて。二首連作の其一。
- (30) 「建安遣興」 淳熙六年五月、建安にて。六首連作の其五。

- (31) 「湖村月夕」 淳熙八年九月、山陰にて。四首連作の其三。
- (32) 「軍中雜歌」 淳熙十年五月、山陰にて。八首連作の其一。
- (33) 「十一月四日風雨大作」 紹熙三年冬、山陰にて。二首連作の其二。
- (34) 「冬夜讀書有感」 紹熙四年冬、山陰にて。二首連作の其二。
- (35) 「示兒」 嘉定二年冬十二月、山陰にて。この詩は原文には引用されていないが、読者の便宜を考え、本文中に引用した。
- (36) 李白「永王東巡歌」 十一首連作の其十一。『李太白全集』（一九七七年九月、中華書局）巻八。
- (37) 『鶴林玉露』甲編卷四、陸放翁 陸務觀、農師之孫、有詩名。壽皇嘗謂周益公曰、「今世詩人亦有如李太白者乎？」益公因薦務觀、由是擢用、賜出身爲南宮舍人。
- (38) 「能仁院前有石象丈餘蓋作大像時樣也」 乾道九年夏、嘉州にて。
- (39) 「題海首座俠客象」 淳熙十一年冬、山陰にて。
- (40) 「讀夏書」 嘉泰二年夏、山陰にて。
- (41) 「戲題」 乾道八年春、梁山にて。
- (42) 「歎俗」 紹熙三年春、山陰にて。
- (43) 「遣懷」 紹熙五年冬、山陰にて。
- (44) 「雜感」 嘉泰三年秋、山陰にて。四首連作の其二。
- (45) 「論鄰人」 開禧元年秋、山陰にて。三首連作。
- (46) 柏梁體 漢の武帝及びその臣下たちによる、「柏梁臺聯句」の体裁。また、その体裁による作品。七言一句で、毎句押韻するのが通例。
- (47) 村上哲見氏の論文「陸游『劍南詩稿』の構成とその成立過程」参照。初出は一九八三年十月、汲古書院発行『小尾博士古稀記念中国学論集』。一九九四年三月、汲古書院発行、村上哲見著『中国文人論』（汲古選書12）所収。